

子出復潤色斯術、神相全編至于茲大成、其爲書玄機明透、更無餘蘊矣、○中乃命家童正之授劄、○中之略

時文化二乙丑年五月端之天

東都雲臺觀石龍子法眼藤原相明謹撰

〔近世畸人傳三〕相者龍袋

龍袋は赤塚氏なれども、幼より他家を繼で、中村を稱す、名重治、通名孫兵衛といへども、號をもてしらす、爲人世務に疎く、家の有無を心とせず、相道に長じ、門人も亦多し、相者は多く既往を知て、將來に味きに、此人つねに門人に會して、其血色を見て曰く、子明日は花見に遊ばんとするや、また一人にはいふ、暮なば青樓に登らんとおもへるやなど、其言一つもたがはず、あるとき一人を制して出入をとむ、いかなる故どもしらざりしに、後に或る家婦に淫せり、其しれるもの、翁に問て、もし此ことにや、然れども其時はさることなかりしにはいぶかしといふ、翁云、血道既に動たり、それも諫てとむむべきなれば、事に先だちてとむべし、諫の及ざるを決するゆゑに、交を斷りと、又博奕にふけりしものも、かくのごとくなりしなど、其門人話せり、凡人を相するに、必心術を説て曰く、相善なりといへども、志不善なれば益なし、相の不善も亦能志行をもて勝べしと、又曰、相を見る人は世に多し、相を行ふ人は稀なり、吾は孤相なり、孤なれば必ず貧なり、孤に居て貧を安すべしと、其家を然るべき人に譲り、一子新次郎といへるも、他の嗣とす、妻ははやく失ひたれば、獨身にて、食あれば喰ひ、盡る時は不食、後また知己門人等に別を告て曰、我餓死の相あり、徒に生て他の施を費べからずと、是より門戸を閉、出入を禁じて不食、數日の後逝せり、齡五十有七也、

〔賤のをだ卷〕相學者に、神谷登とて、京都より下りて、殊の外江府に鳴たり、卜筮者に平澤左内と云もの出で、是も世舉てもてはやしたり、今も市中の筮者の看板に平澤が號を出せるあり、